

K-812

# 大塚天神古墳

## 第4次発掘調査概報

2003

山辺町教育委員会

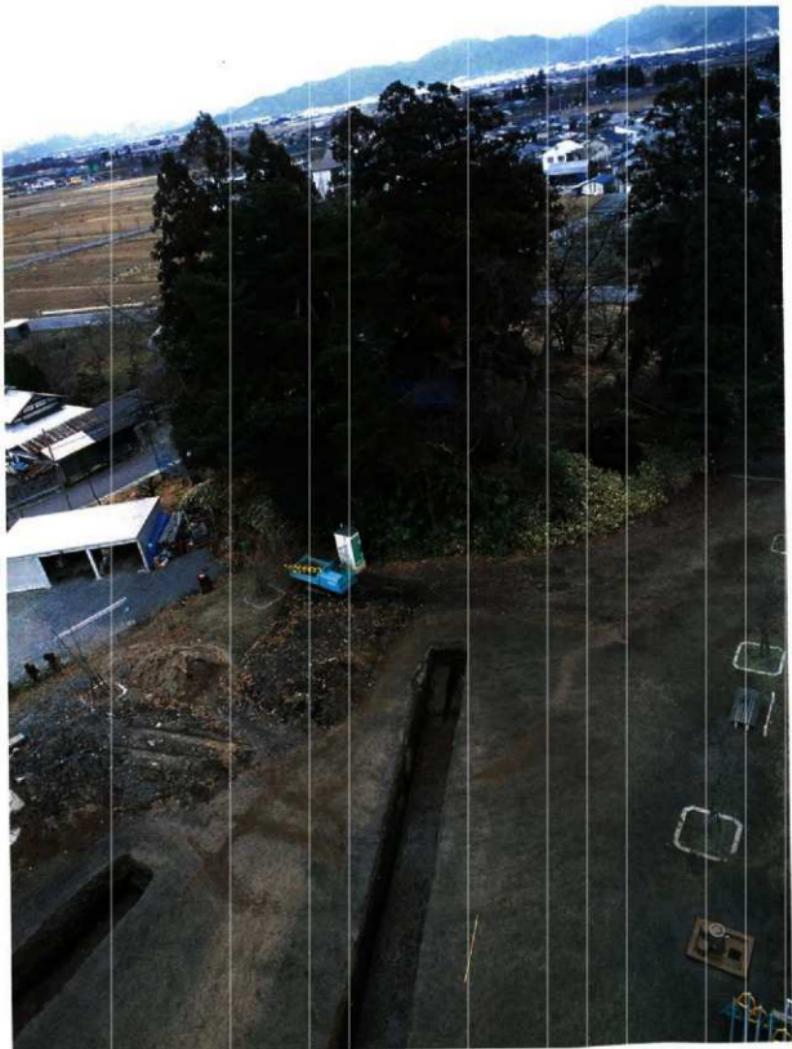
おお つか てん じん

# 大 塚 天 神 古 墳

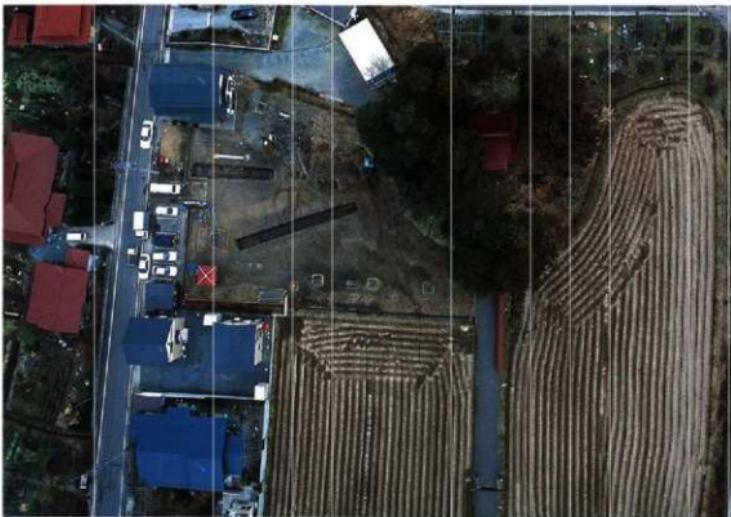
## 第 4 次 発 掘 調 査 概 報

2003年3月

山辺町教育委員会



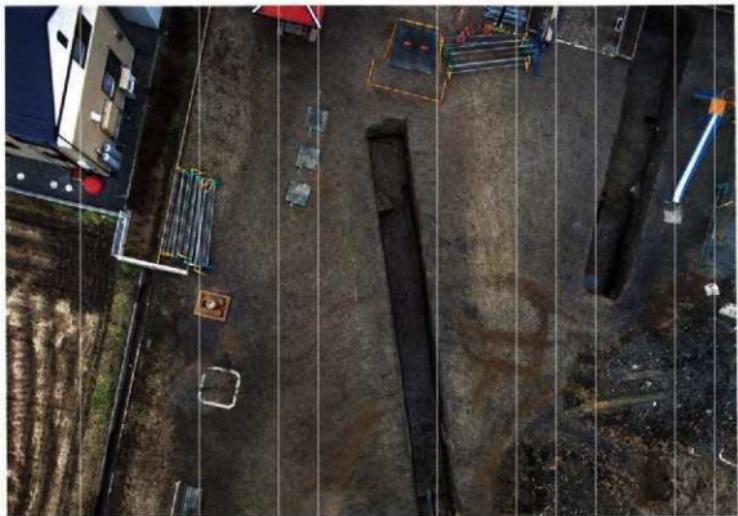
大塚天神古墳（南西方向から）



大塚天神古墳現墳丘上空からの航空写真



平成 14 年度発掘調査区（下が北側）



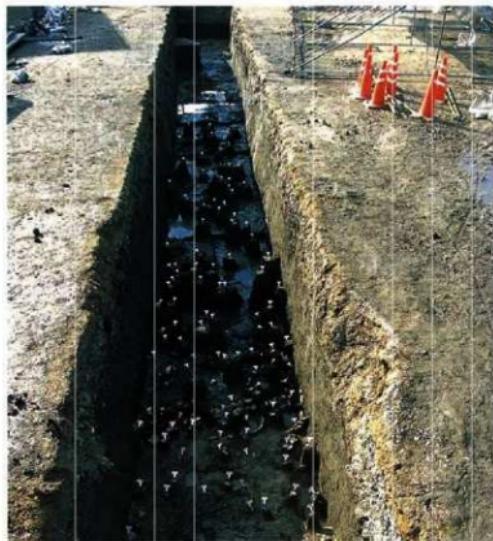
Nトレンチ（東から）



Oトレンチ（東から）



N トレンチの埴輪出土状況



N トレンチの埴輪出土状況



Oトレンチの周溝の立ち上がり（外堤）状況



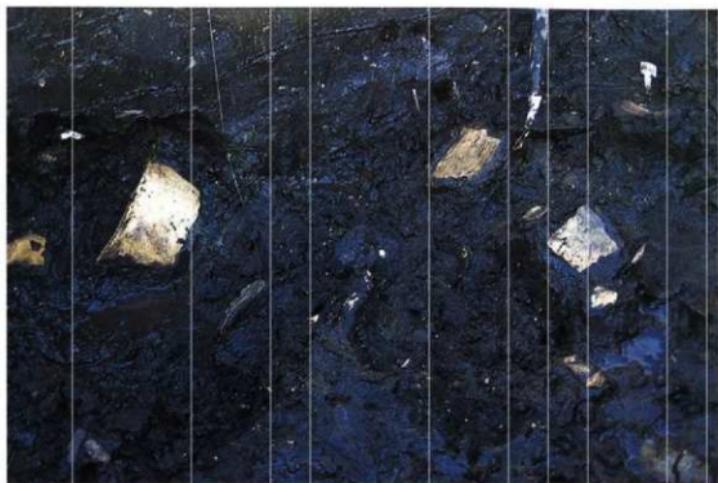
Nトレンチ（西側から）手前が周溝の立ち上がり（外堤）部分



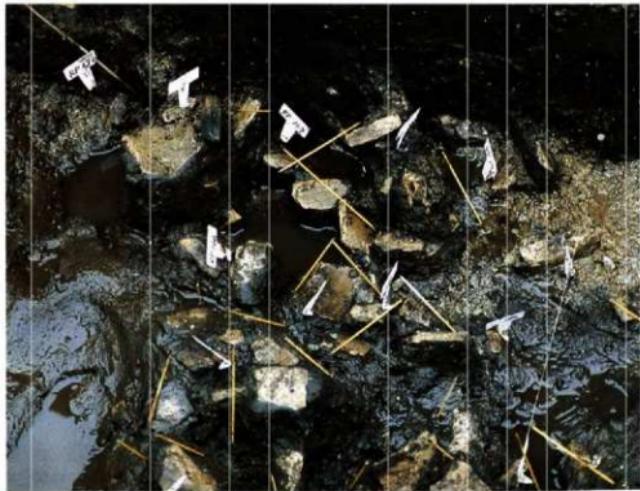
Nトレンチの発掘調査風景



Nトレンチの発掘調査状況



Nトレンチ周溝落ち込み部分より出土した円筒埴輪基底部



Nトレンチの埴輪出土状況



現地説明会の風景



現地説明会における〇トレンチの状況

## 序 文

本書は、平成14年度に行った大塚天神古墳第4次調査の概要をまとめたものです。

この度の調査は、文化庁から国庫補助をえて実施したもので、平成12年度より継続して行ってきた発掘調査の3年目にあたります。

大塚天神古墳を中心として、山辺町における古墳時代の様相を確認し、併せて現在すすめている山辺町史編纂へ反映させることを目的としております。

平成12年度には大塚天神古墳第3次調査、平成13年度には要害古墳（第1号墳）の調査を実施しました。

これらの調査の結果により、今まで不明であった山形盆地における前期古墳（4世紀）の様相の一端が解明されつつあります。

山辺町内において、4世紀から6世紀までの古墳時代には多くの古墳が造られておりますが、これらの古墳の中には山形盆地でも最古に属する古墳もあり、この地域において初めて出現した支配者が山辺町域にいた可能性が伺われます。

また、前方後円墳と埴輪を持つ古墳の2つの日本海側最北限の古墳が存在することは、山辺町域が大和連合政権とエミシが境界を接する最前線にあたることを示しております。

そのような重要な地点であったため、埴輪の製作技法にみるような最先端の技術が畿内より真直ぐに伝わったことでしょう。

最後になりますが、本書の刊行にあたり多大なるご協力をいただいた関係者と関係機関の皆様に対し深く感謝申しあげます。

2003年3月

山辺町教育委員会

教育長 高橋 達雄

## 例　　言

1 本書は山辺町教育委員会が平成14年度に実施した文化庁国庫補助事業による大塚天神古墳の第4次調査概報である。

2 調査要項は次の通りである。

遺跡名 大塚天神古墳

所在地 山形県東村山郡山辺町大字大塚字大塚 1133番地1ほか  
山辺町遺跡番号 OK2

調査期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日

現地調査 平成14年10月28日～平成14年12月24日

現地説明会 平成14年12月13日

調査面積 73 m<sup>2</sup>

調査目的 学術研究

時代 古墳時代

遺構 古墳1基

遺物 墳輪

調査主体 山辺町教育委員会

調査総括 山辺町教育委員会 教育長 高橋 達雄

調査指導委員

川崎 利夫 (山形県立うきたむ風土記の丘資料館長)

茨木 光裕 (日本考古学協会会員)

黒坂 雅人 (財団法人山形県埋蔵文化財センター)

調査担当 三浦 浩人 (山辺町教育委員会文化係長)

調査補助 板垣 賢二

調査作業員 伊藤 重雄・伊藤 豊・鈴木 慶三・三浦 重範・会田 庄治

三部 秋夫・大内 豊・村山 清治・久連山良夫・高橋 玄寿

整理作業員 竹内奈央子

事務局長 舟沼 静穂 (山辺町教育委員会教育次長)

事務局次長 峯田 誠一 (山辺町教育委員会次長補佐)

事務局員 寺嶋 幸子 (山辺町教育委員会臨時職員)

後藤 禮三 (山辺町文化財調査委員長)

佐藤 繼雄 (山辺町文化財調査委員長代理)

鈴木 利明 (山辺町文化財調査委員)

村山 賢司 (山辺町史編集委員)

- 3 今回の調査にあたっては、次の方々より多大なるご協力とご指導をいただいた。  
記して感謝します。

山形県教育庁社会教育課文化財保護室、財団法人山形県埋蔵文化財センター、阿古島功  
(山形大学教授)、大塚地区、大塚地区総代後藤辰男、社団法人山辺町シルバー人材センター、  
株式会社武田組、株式会社セントラル航空

- 4 挿図の縮尺は不統一であり、その都度スケールを明示した。

- 5 本書の作成・編集・執筆は三浦浩人が担当した。

- 6 出土遺物、調査記録については山辺町教育委員会が一括保管している。

## 凡　例

- 1 本書挿図中の方位は、磁北を示している。

- 2 本書で使用した遺構、遺物の分類番号は次の通りである。

S P……ピット　　S K……土壤・埴輪据え付け痕・抜き取り痕

遺構番号は今回新たに付けている。

- 3 土層観察における色調は、1995年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新  
版標準土色帖』に掲った。

# 目 次

## 序文

## 例言・凡例

## 目次

### 第1章 古墳の立地する位置と環境

1 地理的環境 .....	1
2 歴史的環境 .....	2
3 町内の古墳の概要 .....	2

### 第2章 第1次から3次調査の概要

1 第1次調査 .....	7
2 第2次調査 .....	7
3 墓輪シンポジウム .....	7
4 第3次調査 .....	7
5 要害古墳の調査 .....	7

### 第3章 調査の成果

1 調査方法 .....	9
2 Nトレンチの調査の概要 .....	9
3 Oトレンチの調査の概要 .....	14
4 出土遺物 .....	17
5 まとめ .....	18

報告書抄録 .....	29
-------------	----

# 挿 図

図1 大塚天神古墳とその周辺の遺跡 .....	1
図2 山辺南部条里推定範囲図 .....	2
図3 坊主塚古墳群古墳分布図 .....	6
図4 第1次～第4次調査区設定図 .....	8
図5 Nトレンチの平面図と土層断面図 .....	11～12
図6 Oトレンチの平面図と土層断面図 .....	15～16
図7 古墳の推定図 .....	19～20

## 表

表1 山辺町内古墳一覧（古墳推定地を含む）	3～4
表2 山辺町内の古墳分類	5
表3 山形県内の埴輪出土遺跡	17

## 図 版

卷頭図版1 古墳（南西方向から）	
卷頭図版2 上空からの航空写真・平成14年度発掘調査区	
卷頭図版3 Nトレンチ・Oトレンチ	
卷頭図版4 Nトレンチ埴輪出土状況	
卷頭図版5 周溝立ち上がり（外堤）状況	
卷頭図版6 Nトレンチ調査状況	
卷頭図版7 Nトレンチ埴輪出土状況	
卷頭図版8 現地説明会風景	
図 版1 N、Oトレンチのサブトレンチ状況	
S P 1状況	21
図 版2 S P 1状況・S K 1～S K 6状況	22
図 版3 出土埴輪1	23
図 版4 出土埴輪2	24
図 版5 出土埴輪3	25
図 版6 出土埴輪4	26
図 版7 出土埴輪5	27
図 版8 出土埴輪6・古墳遠景	28

# 第1章 古墳の立地する位置と環境

## 1 地理的環境

大塚天神古墳は、標高約110mにあり、山形県東村山郡山辺町大字大塚字大塚に位置する。山形盆地の西側にあたり、山形市の中心市街地からみると北西の方向で、直線でみれば7km程である。

なだらかな山容を示す白鷹丘陵を源とする、中小の河川が東流した先と、山形盆地の扇状地先端部との間に須川が南から北に流れ、最上川に合流する。大塚天神古墳は、その須川の後背湿地（氾濫原）の直上に位置し、白鷹丘陵東側段丘下部の微高地にあたる。

以前湿地であった地域には現在住宅団地が立ち、古墳と住宅団地の間には国道も通り、昔の様相は一変し、大塚地区、近江地区という地域活動の活発な地区となっている。

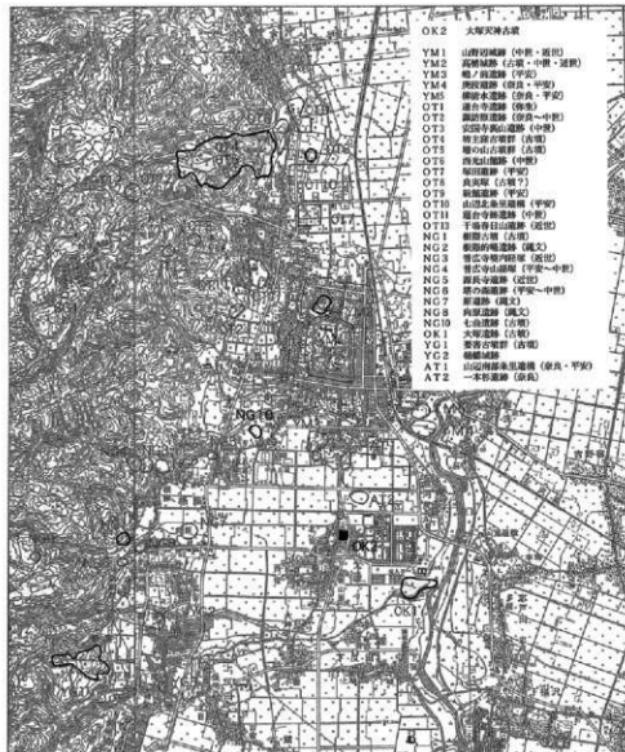


図1 大塚天神古墳とその周辺の遺跡

## 2 歴史的環境

大塚天神古墳のような塚が、以前は5基ほどあり、開発により消失または削平され、現在塚状のものは、大塚天神古墳しか残っていないといわれている。

また、古墳の東約500mの通称熊坂とよばれている地点には、大塚遺跡が存在する。後明沢と須川に囲まれた、段丘に立地する集落跡である。遺物の特徴から4世紀後半から5世紀初頭の集落跡であると推定される。

さらに図2にみる通り、古墳の北部一帯には条里制遺構である山辺南部条里が存在する。8世紀後半から9世紀にかけての水田遺構が県教育委員会の調査で確認されており、この一帯が古くから開発が行われたことを示している。

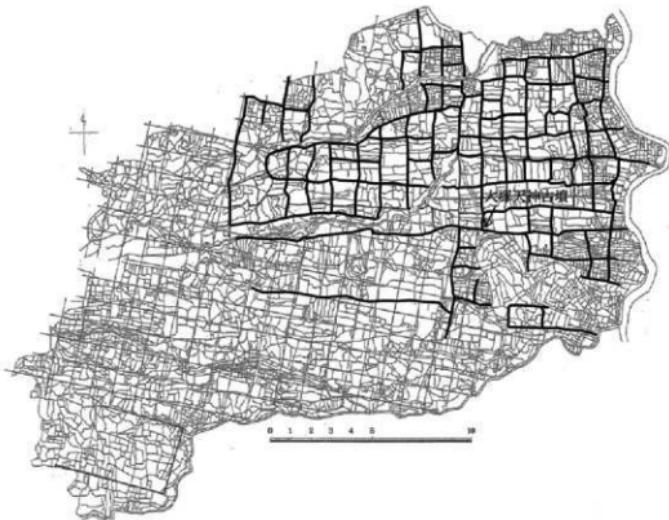


図2 山辺南部条里推定範囲図

## 3 町内の古墳の概要

山形盆地には、古墳が多く存在するところが3地域ある。一つは白川流域、馬見ヶ崎川、高瀬川、立谷川の複合的な扇状地に展開する地域である。2つ目は菅沢2号墳を中心とした地域である。西山形（柏倉門伝）・本沢・南山形（南金井）などの地域となる。

そして3つ目が当山辺町域である。ただ、その支配者（被葬者）を支えたムラはどうであったのか。現在山辺町域で確認されている集落遺跡としては、大塚遺跡、七曲遺跡などがあるのみで、他の古墳が多い地域の集落遺跡に比べてあまりにも少ない。

表1 山辺町内古墳一覧（古墳推定地を含む）

古 墓 名	所在地	立 地	地 目	墳形	墳丘規模 (m)		標高 (m)	段 築	周 溝	埴 輪	葺 石	備 考
					径	高						
坊主塚古墳群 1号墳	大寺字 西光山	台地 (端)	畑	前方 後円墳	主軸長 27.5	後円部 1.45 前方部 0.80	250	○				86年発掘調査 丘陵台地・平坦面 (比較的)に分布
坊主塚古墳群 2号墳					17.7							
坊主塚古墳群 3号墳	主	丘陵中央	畑・ 原野	円墳 (削平)	10.5	0.4	256					丘陵台地・平坦面 (比較的)に分布
坊主塚古墳群 4号墳					8.6	0.9						
坊主塚古墳群 5号墳	塚	台地中央・ 微傾斜	畑	円墳 (?) =削平)	12.2	0.8	246					丘陵台地・平坦面 (比較的)に分布
坊主塚古墳群 6号墳					10.2	0.6						
坊主塚古墳群 7号墳	支	小丘陵中央	畑	円墳 (?) =削平)	10.7	1.1	240					丘陵台地・平坦面 (比較的)に分布
坊主塚古墳群 8号墳					9.9	1.3						
坊主塚古墳群 9号墳	群	台地から 傾斜地へ の変換線	畑	円墳 (?) =削平)	10.9	0.7	239					丘陵台地から傾斜 地への変換点に分 布
坊主塚古墳群 10号墳					14.6	1.3						
坊主塚古墳群 11号墳	塚	台地下方 傾斜地へ の変換線	畑	円墳 (?) =削平)	13.8	0.4	232					丘陵台地から傾斜 地への変換点に分 布
坊主塚古墳群 12号墳					16.5	1.9						
坊主塚古墳群 13号墳	の 山	緩斜面・ 台地の端	山 林	露出を持つ 円墳=帆立 貝式古墳	230		○					丘陵台地から傾斜 地への変換点に分 布
坊主塚古墳群 14号墳					13.3	1.5						
坊主塚古墳群 15号墳	支	尾根上・尾 根の分歧点	山 林	円墳	12.0	0.8	210					丘陵尾根上に分 布
坊主塚古墳群 16号墳					10.7	1.3						
坊主塚古墳群 17号墳	群	尾根上・急 傾斜地	山 林	円墳 (削平)	9.3	1.2	209	△				丘陵尾根上に分布
坊主塚古墳群 18号墳					19.0	4.5						
					17.5	3.5	192	○	△			丘陵尾根上に分布 城館址により改変? 墳頂部延約9m
					15.0	0.5	180					丘陵尾根上に分布 城館址により改変? 墳頂部延約9m

古墳名	所在地	立地	地目	墳形	墳丘規模(m)	標高(m)	標高(m)	段築	周溝	埴輪	葺石	備考
良実塚古墳	大寺字新橋・新田	平地・微高地	畑・田	一	—	—	115?					直刀出土
大塚天神古墳	大塚字大塚	平地・段丘端部	境内地・外	円墳(前方後円墳?)	51.0	4.6	109	2	○	○		97·98·00発掘調査
根際古墳(五ツ森古墳)	根際字南の前	丘陵の突端	畑	円墳	—	—	210					箱形石棺
要害古墳群1号墳	要害字黒坂	丘陵・台地上	山林	方墳	19.0	3.7	286	2		○		北側に平場あり 01発掘調査
要害古墳群2号墳	"	台地平坦面の直下・微傾斜	原野	方墳	10.0	1.0	255					
要害古墳群3号墳	"	舌状に伸びる尾根の先端部	山林	円墳	21.1	2.1	250					
要害古墳群4号墳	"	舌状に伸びる尾根の先端部	山林	円墳(要出持つ?)	19.0	1.9	250					
要害古墳群5号墳	"	丘陵上台地の平坦面端	原野	円墳(方墳?)	15.6	1.1	240		○			
要害古墳群6号墳	"	丘陵台地の急斜面変換地点	原野	円墳(方墳?)	15.8	1.7	235		○			
要害古墳群7号墳	"	丘陵台地の平坦～斜面化	原野	円墳(方墳?)	11.7	1.1	235		○			
要害古墳群8号墳	"	丘陵上台地の平坦面端	原野	円墳(方墳?)	9.8	0.4	240					
猪山古墳	"	山地・舌状台地先端部	—	—	11.8?	0.7?	360					箱形石棺

※ (2)は2段築成の可能性あり。

※ ○は発掘調査により確認した古墳か、現在の地表面から推定できる古墳

※ △は現在の地表面からみて、可能性があると推定される古墳。

※ 墳丘規模の数値は、発掘調査を実施している古墳以外は、現在の地表面からみての数値である。また、簡易な計測であるため誤差を考慮する必要がある。

表2 山辺町内の古墳分類

立地区分	立地の細区分	立 地 状 況	墳 丘 規 模	古 墳 名	墳 形	標 高	分 類 区 分
A型 山地に立地	1群 台地上に立地	1群 台地上の先端部に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	一 櫛山古墳	一 方墳	— 360	— A - 1 - 1② - x
B型 丘陵に立地	1群 台地上に立地	2群 台地のなかの小丘陵の中央に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	要害古墳群1号墳 幼主雍古墳群2号墳	円墳 円墳	280 266	B - 1 - 2① - b B - 1 - 2② - a
		3群 台地上に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群1号墳 幼主雍古墳群3号墳	前方後円墳 円墳	250 246	B - 1 - 3① - ab B - 1 - 3② - a
		4群 台地上の両辺部(奥面)に立地(主に盆地の反対面方向)	③墳丘規模不明	根原五ッ森古墳	円墳	240	B - 1 - 4③ - a
		①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	一 幼主雍古墳群5号墳	一 円墳	— 241	— B - 1 - 4② - a	
		5群 台地上から盆地が見える傾斜変換点に立地	幼主雍古墳群6号墳	円墳	— 240	— B - 1 - 5① - a	
		6群 台地周辺の傾斜面に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群9号墳 幼主雍古墳群10号墳 要害古墳群5号墳 要害古墳群6号墳	円墳 円墳 円墳 円墳	238 232 240 235	B - 1 - 5② - a
		6-1群 盆地側	③墳丘規模が比較的大きい ④墳丘規模が比較的小さい	要害古墳群2号墳	方墳	235	B - 1 - 6-1② - b
		6-2群 盆地側以外	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群1号墳 掘出特有円墳か帆立貝式古墳	掘出特有円墳か帆立貝式古墳	230	B - 1 - 6-2① - a
	2群 尾根上に立地	7群 尾根上の突端(最も盆地に突き出た高地)に立地	①墳丘規模が比較的大きい	幼主雍古墳群1号墳 幼主雍古墳群1号墳 要害古墳群3号墳 要害古墳群4号墳	円墳 円墳 円墳 円墳(掘出有?)	208 192 250 250	B - 2 - 7① - a
		②墳丘規模が比較的小さい	—	—	—	—	—
		8群 尾根上の平坦面に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群15号墳	円墳	208	B - 2 - 8② - a
		9群 尾根上の微高地に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群12号墳 幼主雍古墳群14号墳	円墳 円墳	217 211	B - 2 - 9② - a
		10群 尾根上の傾斜地に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	幼主雍古墳群18号墳 幼主雍古墳群13号墳	円墳 円墳	180 210	B - 2 - 10① - a B - 2 - 10② - a
C型 平地に立地	3群 間高地に立地	11群 丘陵が待わる山麓近くに立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	良実摩古墳 ?	方墳 —	115	C - 3 - 11① - x
	4群 沿岸段丘に立地	12群 沿瀬原を見下ろす高台に立地	①墳丘規模が比較的大きい ②墳丘規模が比較的小さい	大塚天神古墳	円墳(前方後円墳?)	109	C - 4 - 12① - a

※ 墳丘規模は径1.5mに近い取扱を得た古墳を比較的大きい古墳とした。

※ 分類では、a = 円墳・a' = 掘出を持つ円墳か帆立貝式古墳・b = 方墳

a b = 前方後円墳・x = 墳丘形態不明とした。

この負の分布をどのように考えるべきであろうか。ここで仮説を提示してみたいと思う。一つ目の仮説としては、大塚天神古墳の被葬者が、山形盆地南半の広い地域を支配し、その多くのムラムラを基盤にしていたと考えられないだろうか。

二つ目の仮説は、被葬者がムラムラの連合体のうえに担がれている者の場合である。いずれにしても山形盆地内における古墳時代の集落と古墳の発掘調査のデータと研究の蓄積が望まれるものである。

町内の古墳については、推定されるものも含め30基（表1参照）を確認している。表2をみていただきたい。町内の古墳を分類したものである。

その古墳のうち、白鷹丘陵から山形盆地へと傾斜角度を変える傾斜変換線付近に立地する古墳が7基、尾根筋に立地し、盆地に突き出たところにあるのが5基である。

このような地点に立地する古墳は比較的大型の古墳が多い。それ以外には、台地上に立地し、その中の小高い丘中央部に立地するものが3基あり、この3ヶ所で町内の古墳の半数を占めることとなる。ほとんどの古墳は標高200mを越える場所に立地しており、大塚天神古墳などの平地に立地する古墳は少数となっている。

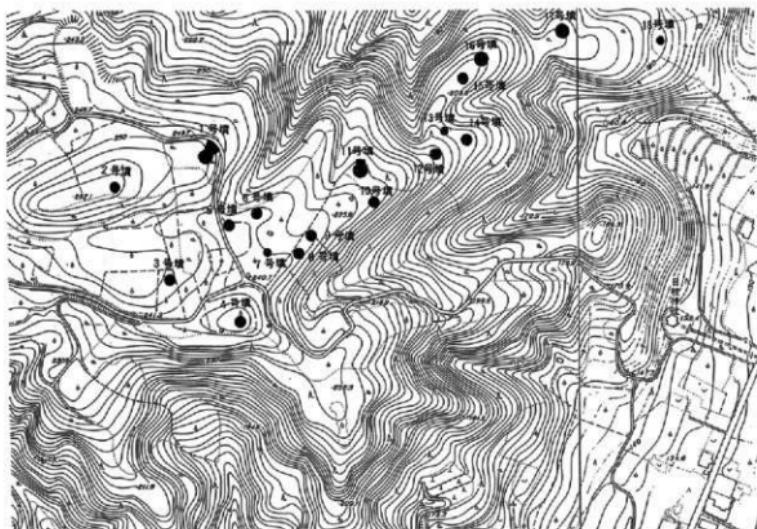


図3 坊主塙古墳群古墳分布図

## 第2章 第1次から第3次調査の概要

### 1 第1次調査

第1次調査は平成8年に実施したもので、現墳丘面の西側に対して4本のトレーニングを設定している。その結果、現墳麓部からどのトレーニングでも10m西側に離れた地点で、地山を削り出した落ち込みを検出した。さらにその落ち込みのラインを中心として多量の埴輪片を検出した。落ち込みは古墳の周りを取り囲む周溝であると考えられ、周溝の幅は15m以上か若しくは掘り込みがない可能性が考えられた。また、墳麓部に設定したサブトレーニングから、後世なんらかの理由で調査区内の墳丘を削り出していることが確認できた。本来は現墳丘が上段となり、トレーニングの墳丘テラス部分で確認出来るより高さを有する下段を持つ二段築成の古墳であると考えられた。以上のことから埴輪を有する古墳としては、日本海側最北限の古墳であり、直径50m規模の円墳であることが推定された。

### 2 第2次調査

第2次調査は平成9年に実施した。墳丘を中心とした調査であった。上段目と下段目の間には平坦面（テラス）があったと推定され、現墳丘東南斜面からは2.6m幅のテラスと推定される部分が検出され、また先のテラス部分には埴輪の据付痕か抜き取り痕と思われる堀り込みが確認された。ほぼ1.1m間隔で樹立したと推定している。

### 3 墓輪シンポジウム

埴輪シンポジウムは、平成9年11月に2日間実施したもので、同シンポジウム実行委員会が中心となり、山辺町教育委員会、山形県考古学会により開催された。県内の研究者の4名の外、県外からは、大塚初重氏（明治大学名誉教授）、車崎正彦氏（早稲田大学）、辻秀人氏（東北学院大学）、藤沢敦氏（東北大）が参加して行われた。大塚天神古墳出土の埴輪は、野焼き焼成による黒斑や外面調整での二次調整タテハケ、内面調整でのケズリ、透かし孔の円形などから川西宏幸氏（現つくば大学）編年の第2期であるとの意見で一致した。

### 4 第3次調査

第3次調査は平成12年に実施された。主に墳丘の東部、東南部、南部において調査区を設定した。その結果、円墳としては、直径約51mをはかり、その外側に16m程度の周溝がめぐることも判明した。埴輪の据付痕と推定される土壌も平坦面（テラス）から検出され、また第1次調査と違い、下段で版築と思われる積み土が確認された。

### 5 要害古墳の調査

要害古墳の調査は平成13年に実施された。その結果、山形盆地で最も最古に位置する古墳（4世紀の方墳）であることが判明した。標高286mに位置し、山形盆地内を見渡せることにある。大塚天神古墳に先行する古墳として重要な古墳と思われる。

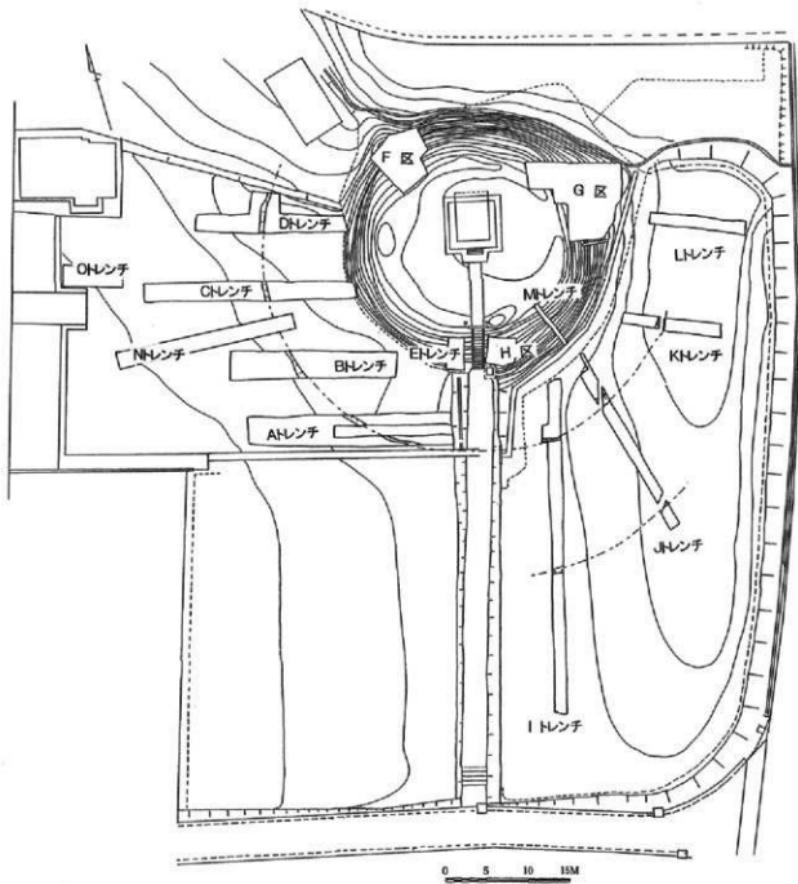


図4 第1次～第4次調査区設定図

## 第3章 調査の成果

### 1 調査方法

今回の調査は、文化庁の補助をえて実施した。

大塚天神古墳は平成8年度に確認された古墳で、8年度に第1次調査、9年度に第2次調査、12年度に第3次調査を実施し、今回が第4次調査となる。

第3次までの調査により、この古墳は径51mの円墳であると推定されている。

また、時代については出土している埴輪より4世紀後半から末の古墳であることがわかつており、日本海側最北限の埴輪を樹立する古墳となる。

当古墳は当町要害地区にある要害古墳群第1号墳に続く、山形盆地にもっとも早く出現する首長墓となる。

山辺町には、この外にも日本海側最北限の前方後円墳である坊主塚1号墳もあり、多くの古墳が分布している。

さて、第1次調査では、古墳の西側を、第2次調査では墳丘を、第3次調査では古墳の東・南部を調査しており、周溝が古墳の周りを東から南、そして西へとめぐることがわかつている。

今回の第4次調査は、第1次調査を実施した場所の間から、西に伸ばしたところに調査区を設定した。第1次調査の際に周溝の立ち上がり部分（周溝が上がっていく箇所・外堤）が確認出来なかつたことから今回あらためて調査している。

調査区については、第1次調査で実施したBトレンチとCトレンチの間を墳丘に向かって放射状に設定したところをNトレンチ、CトレンチとDトレンチの間の西側から墳丘に向けて設定した箇所をOトレンチとした。

トレンチはそれぞれ2m幅程度を設定している。

### 2 Nトレンチの調査の概要

Nトレンチは、周溝の始まりから終わりまでを確認するために実施した。

幅2mで長さ20m50cm、面積は41m<sup>2</sup>となる。

この調査区では第1次調査で確認できなかつた周溝の始まりと周溝の立ち上がり（外堤）を確認している。

周溝の立ち上がり（外堤）を確認するため、公園の遊具が設置してある場所のぎりぎりまで調査区を設定した。重機で現地表面の表土を剥ぐと、工事による盛土が厚く積んである。旧耕作土面までは70cm前後となる。

さらにその下の層には、全面にボツボツとした明るい褐色の小礫を含むしまつた細砂層がある。この層は墳丘面から周溝上、さらに周溝の外周部分にもみられる。周溝が埋まってから、洪水などのために一気に堆積したものであろうと推定される。

さらにその下は黒色の層との漸移層をはさみ、黒色の粘土層がある。

この黒色層は、周溝の内面のみにみられ、周溝が埋まっていった際に一番上面に堆積した

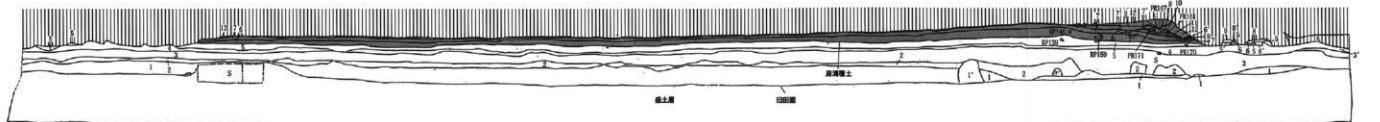
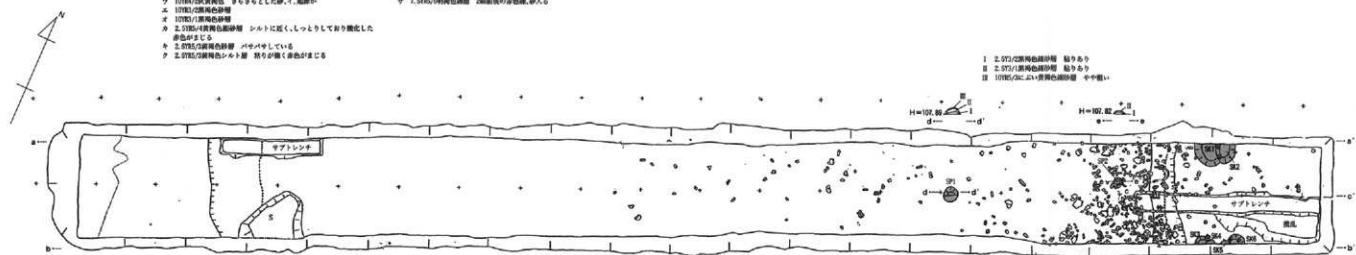
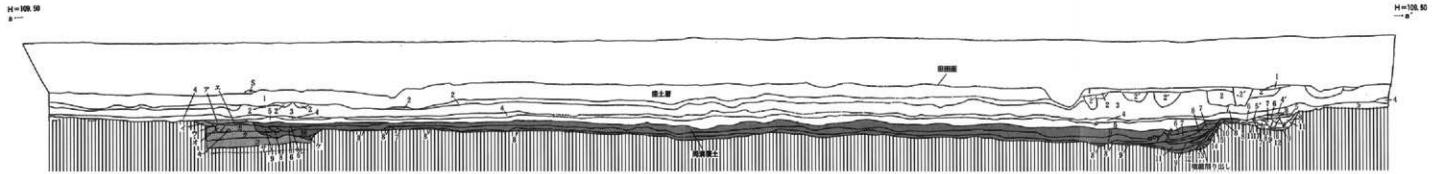


図5 Nトレンチの平面図と土層断面図

層で、周溝の範囲を確認するためのキーとなる層である。

なお、周溝内では約3層程度の土層の変化がみられる。

遺構について説明すると、墳丘の部分は今回の調査では2m71cmほどを確認している。いわゆるテラスにあたる部分である。なお、東南の部分は平成8年度に古墳であるかどうかの調査をした際に掘られたところで、搅乱されている。

天溝神社のある、現墳丘の下となる現表土の下に残る墳丘は、第1次調査の結果により、古墳が造られてから比較的早い時期に上面が削平されたと考えられている。今回の調査では削平されたと推定できる部分は確認できなかった。しかし、周溝が埋まり、かつ洪水等があつた段階で、すでに墳丘は削平されていたと思われる。

また、埴輪の据付痕（埴輪を置いた痕跡）と推定される土壙（SK1、3、6）も3カ所確認されている。北の壁側では周溝底から92cm墳丘に向かったところにSK1の円形約半分が検出されている。径約30cmで深さ15cmとなる。その東となりに抜取痕（埴輪を抜取るために掘った穴の痕跡）と思われる土壙（SK2）がある。

南の壁際にも周溝底より1m30cmと80cm東へ向かったところに半円形の土壙がある。SK6は径26cmで深さ10cm、SK3はその一部分だけだが推定すると径30cm前後で深さ8cmになる。双方とも抜取痕と思われる土壙（SK5、SK4）が隣にある。

北側の土壙の下（西）に円筒埴輪の底部（基部）が転がったように出土しており、想像をたくましくすれば、古墳が削平される際に抜取られた可能性が考えられる。

墳丘と周溝の比高差は41cm前後である。周溝の立ち上がり部分（西側）と違い急斜面となって周溝に落ち込む。（落ち込み線から周溝下まで平面で50cm）

この墳丘は、泥炭層（黒泥）の上に堆積した5～6層の砂と礫である地点に、盛土を行い、その盛土した最上層及びその下の層の一部を成形して墳丘のテラスとし、泥炭層の1層上の粘土層（泥炭層が変化した層とみられる）まで削り出し周溝としたと推定される。当初、粘土部分より上面は積土である可能性も考えていたが、砂と礫が無規則に混じる状況や、他地点のサブレンチの状況（砂も粘土も水平に堆積しており、自然に堆積したと推定されること等）により周溝を削り出していることを是とした。

周溝内にはピットを2箇所確認している。周溝の底の始まりから63cm西のところに円形で径10cm、深さ5cmのSP2と、同じく7m50cmのところにある、円形で径23cm深さ8cmのSP1である。双方とも浅く、覆土から遺物が出土していないが、古墳に関連するものである可能性も否定できない。

周溝の底の土は均一のものでなく、墳丘より4m50cmから7m50cmまでは明褐色のブロックを含んだ細砂となっており、その東と西はともに粘土となる。

また、周溝の底面には直線的な黒い痕がほぼ全面にみられる。葦などが腐食した痕である可能性も考えられる。

周溝の立ち上がり部分は比高差で30cm、平面で80cmから1cmとなる。だらだらとした傾斜を呈する。この部分は黒色泥炭層（黒泥）の上に、泥炭起源の粘土（周溝の底）、砂、砂

利を含む砂、細砂、クサレ礫などを含む細砂層となっている。最上層の細砂層を成形し、その下の粘土直上までを削りだして周溝（外堤）を造っている。

外提の西の方にいくに従って若干の高まりがみられる。

なお、この部分には大きな石が埋められていたが、最近の工事の際に埋められたものである。また、黒色の粘土層が周溝の終わりとともに途切れることから、この黒色粘土層がみられる地点は、周溝内であると確認できる。

### 3 Oトレンチの調査の概要

Oトレンチは、Nトレンチと同様に周溝の立ち上がり（外堤）がみられるかを確認するために実施した。ただし、東側は第1次調査のCトレンチと重複することになるため、調査区外とした。

幅は西面2m50cm、東面で2mで、長さ14m50cm、面積は約32m<sup>2</sup>となる。

調査の結果Nトレンチと同様に周溝の立ち上がり（外堤）を確認している。周溝の立ち上がりを確認するため、公園の植栽ぎりぎりまで調査区を設定した。土層についてはNトレンチと基本的に同じである。ただし、公園整備などのためか、西から北面にかけて大きく一面に搅乱がみられる。また、Nトレンチと同様工事により埋められた大きなコンクリートとも思われる石もみられる。旧耕作土面までは90cm前後で、その下の層には、全面にポツポツとした明るい褐色の小礫を含むしまった細砂層があり、（周溝が埋まってから、洪水のために一気に堆積したものであろうと推定される）、さらにその下は漸移層をはさみ、黒色の粘土層がある。Nトレンチと同様に、周溝の内面のみにみられ、周溝が埋まっていた際の一番上面に堆積した層で、周溝の範囲を確認するためのキーとなる層である。

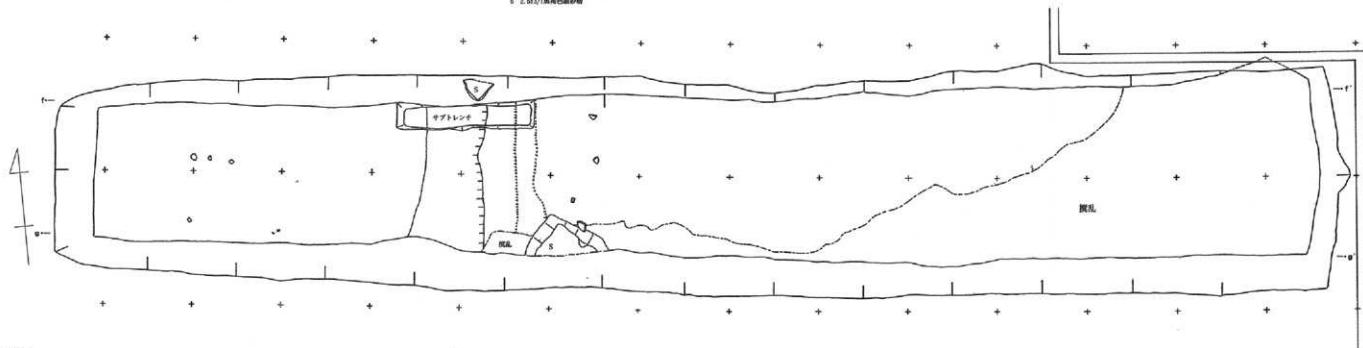
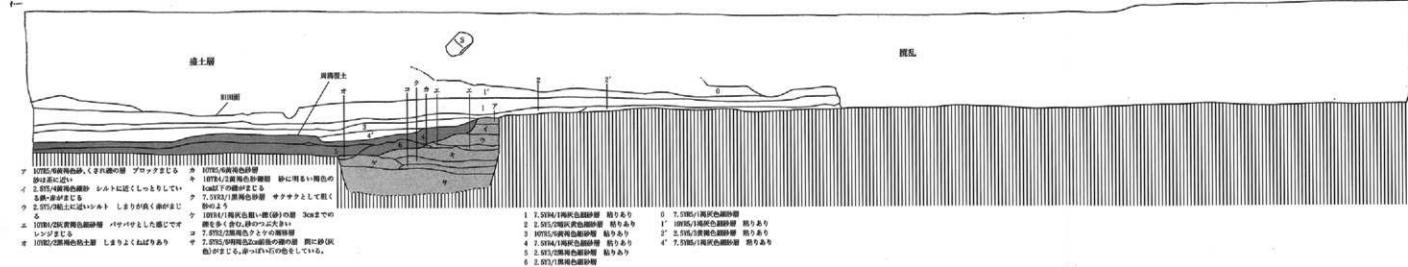
なお、周溝内ではNトレンチ同様約3層程度の土層の変化がみられる。

周溝の中の土は、上面は粘土が見られ、その下は砂層となり、一番下は周溝底面との漸移層となる。

周溝の立ち上がり部分は比高差で43cm、平面で1m20cmから30cmとなり、だらだらとした傾斜を呈する。この調査区のサブトレンチでは、Nトレンチで検出された黒色泥炭層（黒泥）は確認できなかった。グライ化したような砂利の上に砂利、砂、砂利、粘土、細砂、クサレ礫を含む細砂層となる。上層を成形し、3層下の砂利層まで削り出して周溝を作っている。

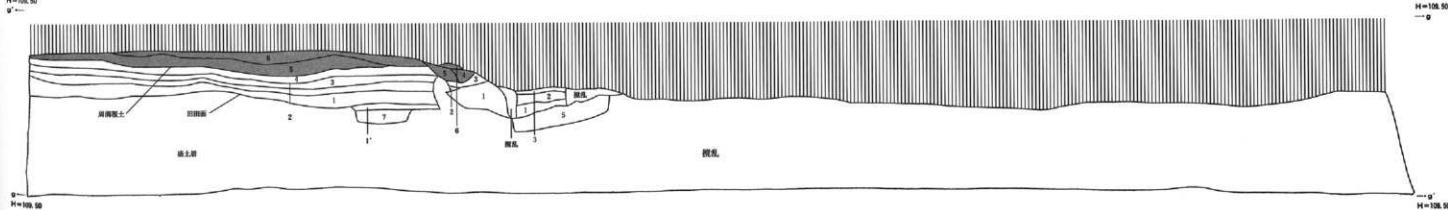
H=108.50

H=108.50



H=108.50

H=108.50



0 50m 1m

図6 Oトレンチの平面図と土層断面図

#### 4 出土遺物

今回出土した遺物は円筒埴輪と朝顔型埴輪のみで、整理用コンテナで12箱（調査時点でおよそ200片）が出土した。第1次調査の際には少なかった埴輪の基底部が比較的多く出土している。

現在整理中であるため、その概要のみを報告する。

まず、透かし孔はすべて円形となる。また、多くが黒斑を有し、外面調整は2次調整タテハケを用いており、内面調整はほぼヨコハケを主として一部にはタテ方向のケズリもみられる。

突帯は、埴輪外面に一定の間隔で取り付けられる突起状の帯である。断面でみると、角部分が突出化、鋭角化している形状や、角の突出がやや弱くなり台形の形状をしているもののが大きくわけて2種に分けられる。また、基底部の底面には凸凹の痕跡が残っており、底部の調整は行われていない。

なお、埴輪の検討と考察は、後日まとめて報告する予定である。

遺跡名	遺跡区分	所在地	焼成	器種	川西編年	備考
大塚天神古墳	古墳	山辺町	野焼焼成	円筒 朝顔	Ⅱ期	
菅沢古墳群 2号墳	古墳	山形市	窯窯焼成	円筒 朝顔 器財 動物 人物(?)	V期 一部 IV期	
菅沢古墳群 1号墳	古墳	山形市	窯窯焼成	円筒		
土矢倉古墳群 1号墳	古墳	上山市	窯窯焼成	円筒 人物	V期	
土矢倉古墳群 2号墳	古墳	上山市	窯窯焼成	円筒 朝顔	V期	
土矢倉古墳群 3号墳	古墳	上山市	窯窯焼成	円筒	V期	
風間古墳	古墳	山形市	窯窯焼成	円筒	—	
鶯の森古墳	古墳	山形市	窯窯焼成	円筒	—	
一ノ坪遺跡	集落	山形市	窯窯焼成	円筒	V期	平成12年度

表3 山形県内の埴輪出土遺跡

## 5まとめ

今回の調査の成果としては、第1次調査で確認できなかった、墳丘西側の周溝の幅と周溝堤（外堤）を確認できたことが第1に上げられると思われる。

周溝の幅は上面で15m90cm、底面で13m80cmとなる。

また、第1次調査で確認できなかった、埴輪の据付痕及び抜取痕が検出された。これにより、当古墳が2段築成であるとすれば、その下段の周りに平坦なテラスがあり、そのテラス部分に埴輪を樹立していることがわかる。

平坦なテラス面から周溝を成形するため、地山を削り出し、特に周溝の底は、砂層が終了し、粘土層が現れる前後の層まで掘り込んでいる。

地山は礫や砂を中心とした層によりなっており、人口的に、盛土した層でないことが確認できる。

ただし、最上面には炭化物が少々まじる細砂層を盛土し、成形していると思われる。

検土杖（ボーリング棒）により、周溝の底面より下を確認しているが、Nトレントのサブトレント部分では、黒泥及びその変化した層（オレンジ色や、あかっぽい灰色など酸化したと思われる層）が深さ80cm前後堆積し、その下に礫層がある。Oトレントのサブトレントでは、4層目に、Nトレントのサブトレント部分と同様の礫層を確認できるが、黒泥などの層は、もっとも東の部分では検出されない。最大で25cm程度しかない。レベル等を考慮すると、もともとは地形的には北西から南東に傾斜する地形であったために、黒泥の堆積はOトレントは少ないと考えられる。又、第3次調査の結果、墳丘南東部においてテラス部分は、積み土であったことが確認されたが、大塚天神古墳は、その地形上の制約から高くなっている墳丘西側においては、地山を削り出し、低くなっている南東部においては、積み土を行っていることが判明した。

また、墳丘時代のプラン（設計）として51mの円墳の周りに東南面で16m、西面でも16mの周溝がめぐることとなり、直径83m程度のプランを有する大規模な土木工事が行われたことになる。

県内の古墳の中では周溝の幅は最大であり、そのプランも有数の古墳であることがわかつた。県内の類例としては、このような周溝の大きな古墳は置賜地方には少なく、むしろ奥羽山脈を越えた陸奥国側の宮城県に幾例か存在する。

なお、最後になりましたが、雨と雪とさらには泥まみれになりながら作業を行ってくださった作業員の皆様に心より感謝申しあげます。

## 参考文献

- 『菅沢2号墳発掘調査報告書』1989 山形市教育委員会
- 『坊主塚古墳1号墳予備調査報告書』1989 山辺町教育委員会
- 『大塚天神古墳第1次調査概要』1997 山辺町教育委員会
- 『大塚天神古墳第2次調査概要』1999 山辺町教育委員会

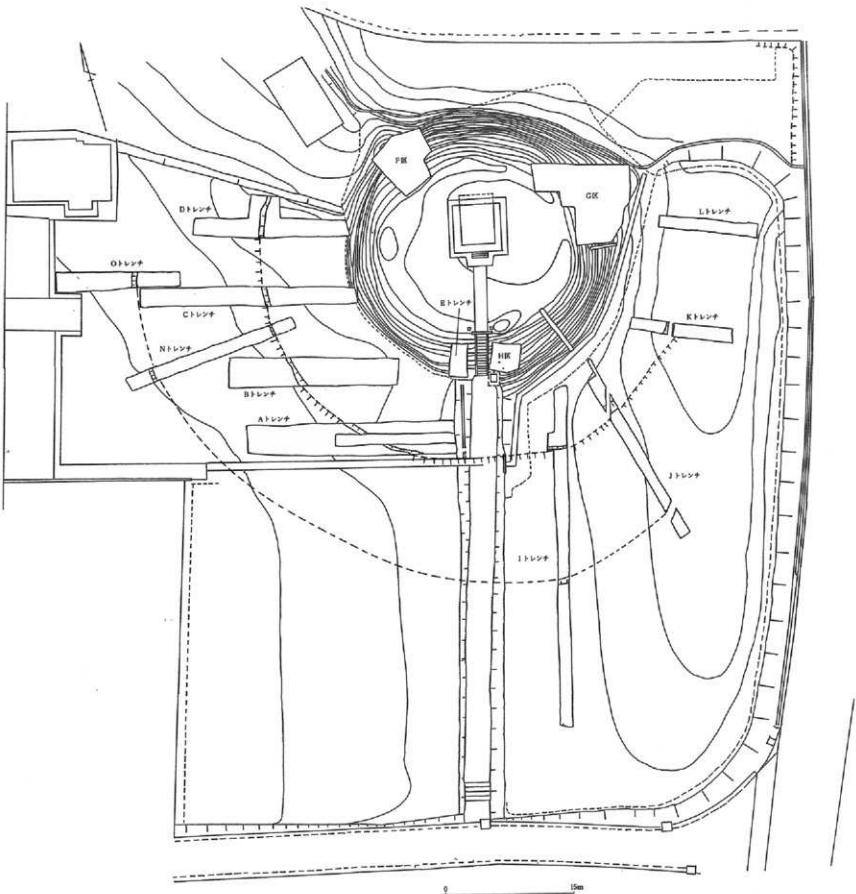


図7 古墳の推定図



Nトレンチ周溝立ち上  
がり(外堤)部分のサブ  
トレンチ状況



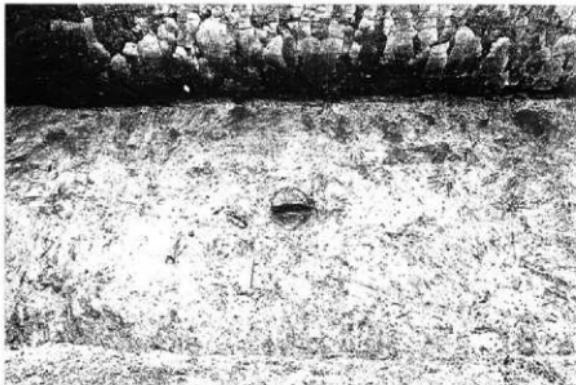
Oトレンチ周溝立ち上  
がり(外堤)部分のサブ  
トレンチ状況



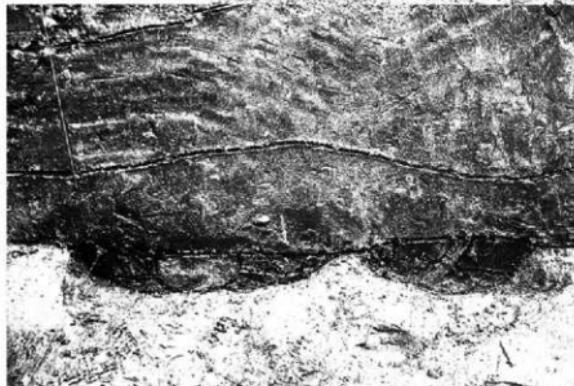
Nトレンチ周溝内SP  
Iの状況

図版2

Nトレーンチ周溝内SP  
Iの遠景



Nトレーンチ壙丘テラス  
部分の壙輪据付・抜取  
の痕と推定される土壤  
(SK3～SK6)



Nトレーンチ壙丘テラス  
部分の壙輪据付・抜取  
の痕と推定される土壤  
(SK1、SK2)





口縁部  
(表)

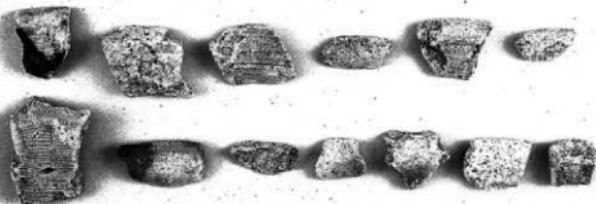
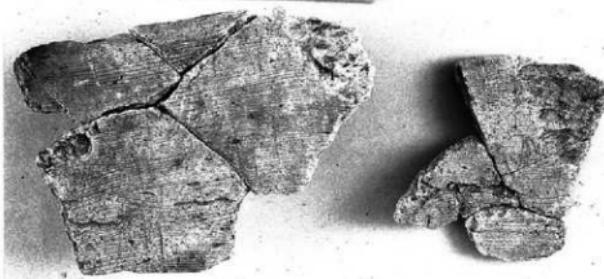


口縁部  
(裏)

出土埴輪1



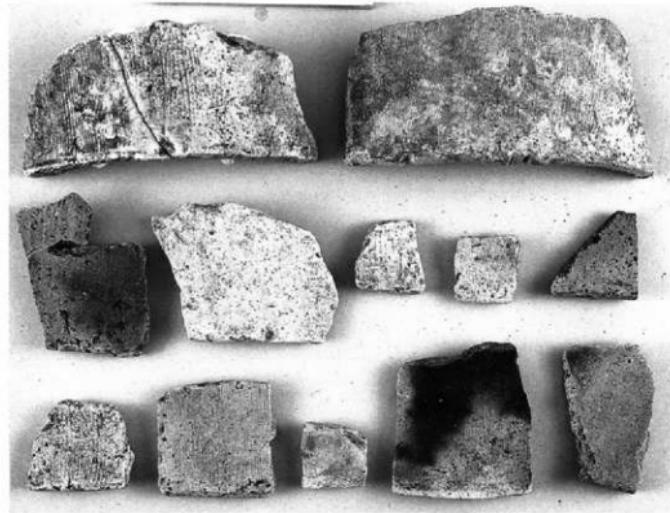
脚部



口線部

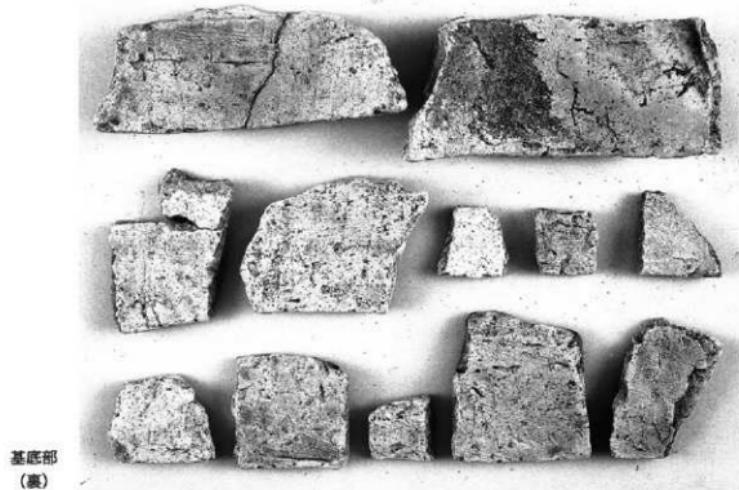
出土埴輪 2

圖版 5



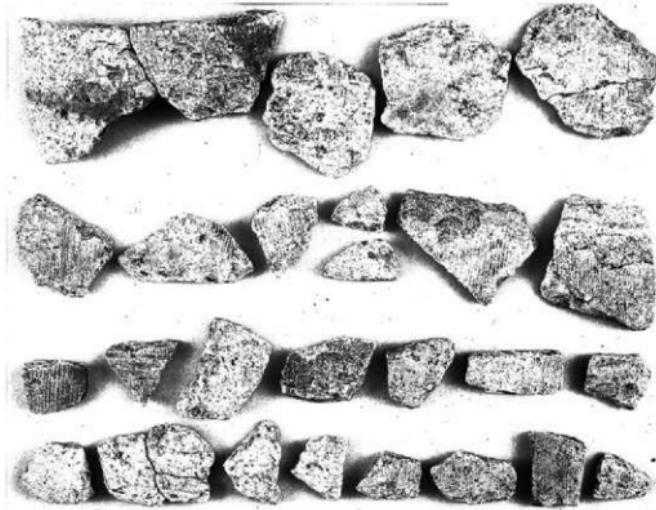
基底部  
(表)

0 5 10 15

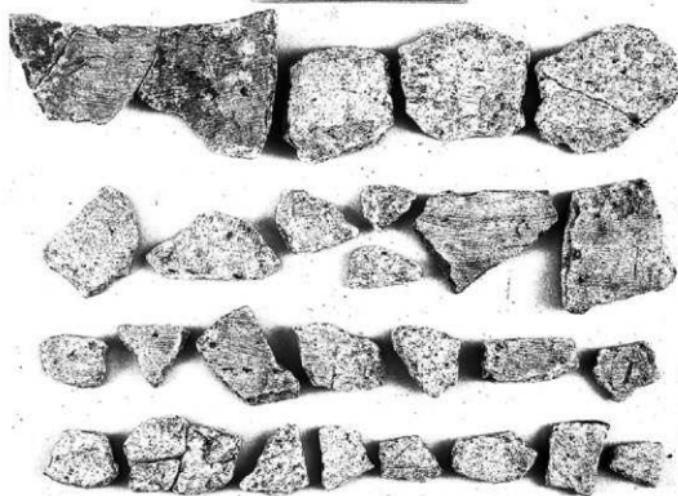


基底部  
(裏)

出土埴輪 3



輪部  
(表)



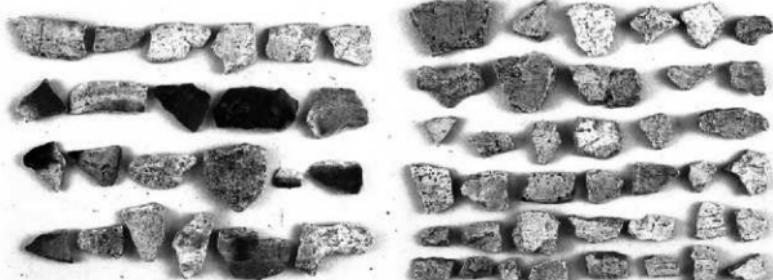
輪部  
(裏)

出土埴輪 4



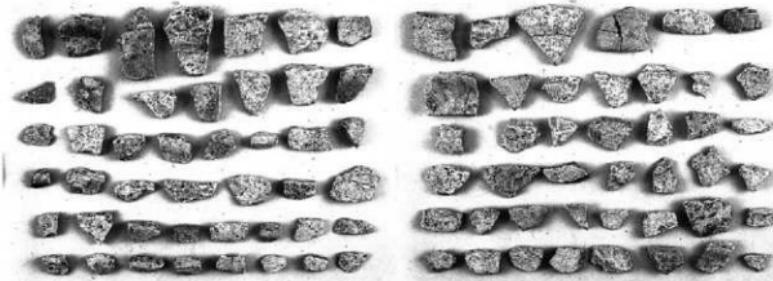
胸部

胸部外



胸部 (表)

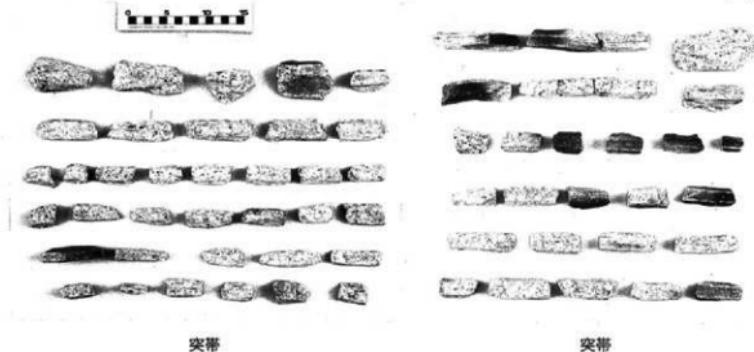
胸部 (裏)



胸部

胸部

出土埴輪 5



出土埴輪6



大塚天神古墳遠景

## 報告書抄録

ふりがな 書名	おおつかてんじんこふんだいよじはつくつちょうさかいほう 大塚天神古墳第4次発掘調査概報							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山辺町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	三浦 浩人							
編集機関	山辺町教育委員会							
所在地	〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地							
発刊年月日	平成15年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大塚天神古墳	山形県 東村山郡 山辺町 大字大塚字 大塚1133番 地の1ほか	6301	山辺町遺 跡番号 OK2 平成8年 度登録	38° 16' 43"	140° 16' 13"	20021028 ～ 20021224	73m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大塚天神 古墳	古墳	古墳時代 前期	周溝 埴輪据付痕 ピット	埴輪 (円筒埴輪・朝顔 形埴輪)	埴輪を持つ古墳と しては、日本海側 最北限の古墳であ り、山形盆地でも 類例の少ない前期 古墳である。			

---

大塚天神古墳第4次発掘調査概報

山辺町埋蔵文化財調査報告書第12集

平成15年3月31日

編集 山辺町教育委員会  
発行 山辺町教育委員会  
〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地  
電話 023-687-1115  
印刷 藤庄印刷株式会社  
〒990-0821 山形県山形市北町1-3-1  
電話 023-684-5555

---